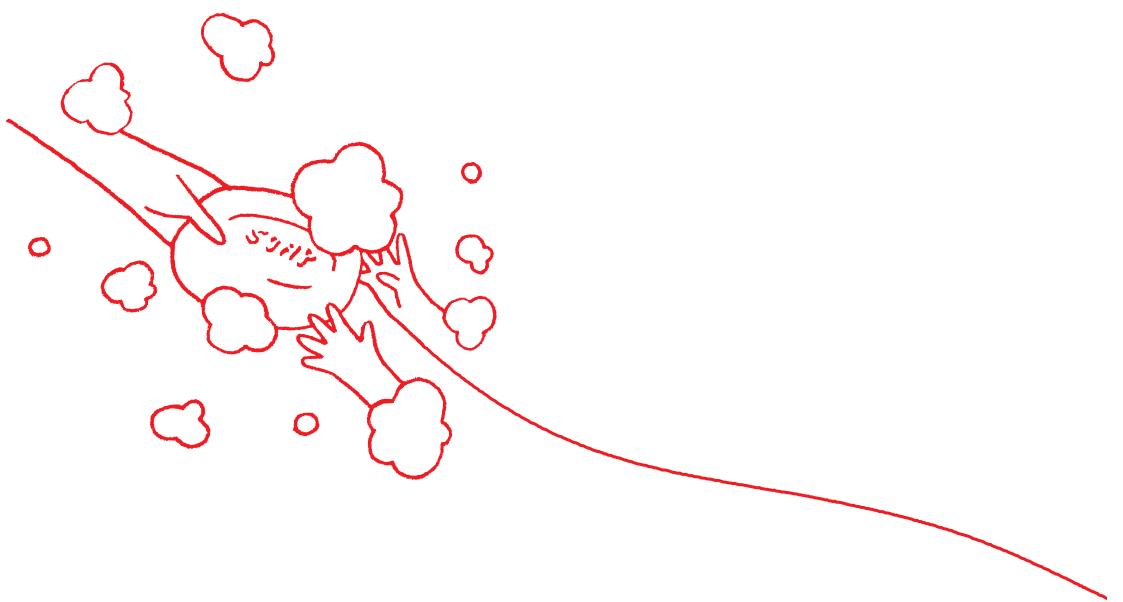


石けんをめぐる旅



ずっと変わらぬ やさしさ。  
牛乳石鹼

牛乳石鹼共進社株式会社  
ホームページアドレス [www.cow-soap.co.jp](http://www.cow-soap.co.jp)

本 社 / 〒536-8686 大阪市城東区今福西2丁目4番7号・電話06(6939)1451  
札幌 営業所 / 〒064-0823 札幌市中央区北三条西28丁目2番1号・電話011(641)4306  
東京第一営業所 / 〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町12番6号・電話03(3662)1881  
東京第二営業所 / 〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町12番6号・電話03(3662)1881  
名古屋営業所 / 〒465-0033 名古屋市名東区明が丘47番1号・電話052(769)4641  
大阪 営業所 / 〒536-8686 大阪市城東区今福西2丁目4番7号・電話06(6939)1452  
中四国営業所 / 〒536-8686 大阪市城東区今福西2丁目4番7号・電話06(6939)1453  
福岡 営業所 / 〒812-0011 福岡市博多区博多駅前3丁目29番21号・電話092(411)6271

ご存知ですか、  
石けんは紀元前生まれ。  
はじまりは、  
約5000年前に遡ります。

石けんの国内流通量は、1980年代をピークに減少の傾向にありました。近年は減少ペースも一時期に比べゆるやかになり、市場の縮小傾向も底打ちとみられます。2010年に入ると、国内メーカーの出荷量が前年比から上向きへ。現在ますます、石けんが見直され、選ばれる機会が増えています。時代は変わっても今もなお、私たちに寄り添い、使われ続ける石けん。

まずは、その長い歴史の中から、石けんの起源はどういったものだったのか、世界の、そして日本の石けんはどのように誕生したかを紹介します。



### 石けんの起源を、紀元前に発見。

汚れを落とす土として重宝。

石けんをめぐる旅のはじまりは、紀元前3000年頃の古代シュメール（現在のイラク）。当時の粘土板に、すでに石けんが塗り薬や布の漂白に使われていたことが記されています。そして古代ローマ時代のはじめ頃のこと——サポー（SAPO）という丘の神殿では羊を焼いて神に供える風習がありました。その時したり落ちた羊の脂が木の灰と反応して自然に石けんができ、その成分がしみこんだ土は「汚れを落とす不思議な土」として珍重されるようになります。英語で石けんを意味するソープ（SOAP）の語源は、この“サポーの丘”に由来すると言われます。こうしてはじまった石けんの旅は、同じく古代ローマから生まれた「お風呂文化」と一つになって、やがて日本へと続いていきます。



石けんは古代ローマのお風呂と発展

### ヨーロッパで人気、そして日本デビュー。

実はお風呂で石けんを使うようになったのは、発明されてからずっと後。それまでは皮膚病の治療や食器類の洗浄などに、高貴な人たちだけが使用していました。石けんで体を洗う習慣が一般に広まったのは12世紀ルネサンスの時代とされ、フランスのマルセイユやイタリアのサボナなど地中海沿岸でつくられたオリーブ油を含む硬い石けん（硬石けん）がヨーロッパ中で人気を博します。日本に初めて石けんがやってきたのは16世紀。鉄砲の伝来と同じ頃にポルトガルの交易船からもたらされ、それを手にできたのは将軍や大名など限られた人たちだけでした。このとき日本に伝わったシャボンという呼び名は、当時の代表的な生産地サボナが語源だとされています。



ポルトガルの交易船より石けんは伝わる

### 世界の石けんから、日本の石けんへ。

明治の初期になって、ようやく日本でも石けんの販売がはじまります。しかし、当時の石けんはまだまだ高価ないたく品で、庶民の手には届きません。木灰などを水に溶かして上澄みをとった「アク」で洗濯をし、ヘチマや軽石を使って体を洗う、というのが一般的だったようです。ようやく明治の中頃になって国内にも石けん工場ができ、高価な外国産に代わって安価な国産石けんが普及はじめます。まさにジャパンのシャボン。このようにはじまった日本人と石けんとの出会いは、元来のお風呂好きの国民性ともあいまって、やがて独自の生活文化を育てていきます。



困難な時代も、  
古き良き時代も知っている。  
石けんの歴史は、  
私たちの歩みでもあります。

固形のいわゆる石けんが、日本でつくられるようになったのは1870年頃。

文明開化、産業振興のシンボルであり、化学工業の出発点が石けん製造でした。

その後、石けんは戦火をくぐり、平和でゆたかな日常生活に欠かせない日用品となっていき、贈答品としての需要も相まって、1959年には全体で38万トンという生産量をつくります。

こうして、誰でも安価に石けんを購入し、洗顔、入浴、洗濯に使うようになりますが、石けんを使う習慣の定着の背景には、戦前から戦後にかけての重要な事実がありました。



### 戦前と戦後をくぐり抜けてきた石けん。

国策として“富国強兵”をめざした明治政府は、軍隊内の保健衛生向上のために石けんの製造と使用を奨励。それが日本人に石けんを使う習慣を広く浸透させ、石けん業界もそれまでの手工業から、化学的な製造法に基づいた近代産業へと飛躍を遂げることになります。しかしその歴史も、第二次世界大戦を境に大きな転換点をむかえます。日を追って強まる戦時下の経済統制のもと、物資や労働力の不足からメーカーの廃業が相次ぎ、絶望的な状況の中でむかえた敗戦。焦土と化した日本で石けん事業の再興を期するにあたっての「ある思い」が、当時の牛乳石鹼の資料に次のように綴られています——「戦後の混乱しきった世相の中で、当社がなにをすればよいかと考えると、やはりよい品、よい石鹼を作ること以外になかった。なんの娯楽もない市民の方々に、ささやかではあっても、ブーンと花の香りがただよう化粧石鹼をお届けしたら、どんなによろこんでもらえるだろうと、ただそのことだけを願った」。そして戦後の復興期から高度成長期へ、石けんは多くの日本人の苦労と汗を洗い流していくのです。



配給制当時のチラシ

### 石けんといえばお風呂との深い関係。

戦後復興から高度成長へ。時代の流れにつれて、日本人のお風呂の時間も町の銭湯から我が家のお風呂へと移り変わっていきました。その中で、今日まで変わらずに残っているのは、お風呂を彩る石けんの思い出。私たちのもともに、そんな思い出にまつわるお便りがたくさんの方から寄せられます。そして興味深いことに、そのエピソードのほとんどが「子ども時代の記憶」や「子育ての記憶」につながっています。家のお風呂で、兄弟みんなで「洗いっこ」をした思い出。一つしかない石けんを銭湯の男湯と女湯の壁越しに分けあって、家族みんなで使った思い出。石けんの香りとともによみがえる、おじいちゃんやおばあちゃんのなつかしい面影。その時間の中で子どもたちは思いやりの心、ものを大切にする心、そして社会のマナーやルールを教わります。お風呂は子どもたちにとって遊びの場であり、学びの場、育ちの場。そしてそこには食卓の会話よりももっと深い、肌と肌とのコミュニケーションがありました。その大切なものを次の時代につたえるために。お風呂の時間はさらに未来へつながっています。



お風呂とともに継承される石けん文化

変わり続ける時代に、  
変えてはいけない思いがある。  
石けんを考えることは、  
未来を考えることです。

昨今、1個あたり100円前後の石けんが売れているといいます。

その好調な理由として挙げられるのが、当用買いの増加。

年々、ギフトの習慣が薄れ、石けんをギフトに選ぶことも、  
もらう機会も減少したため、家庭で使う石けんをその都度、  
購入する必要が高まってきた。

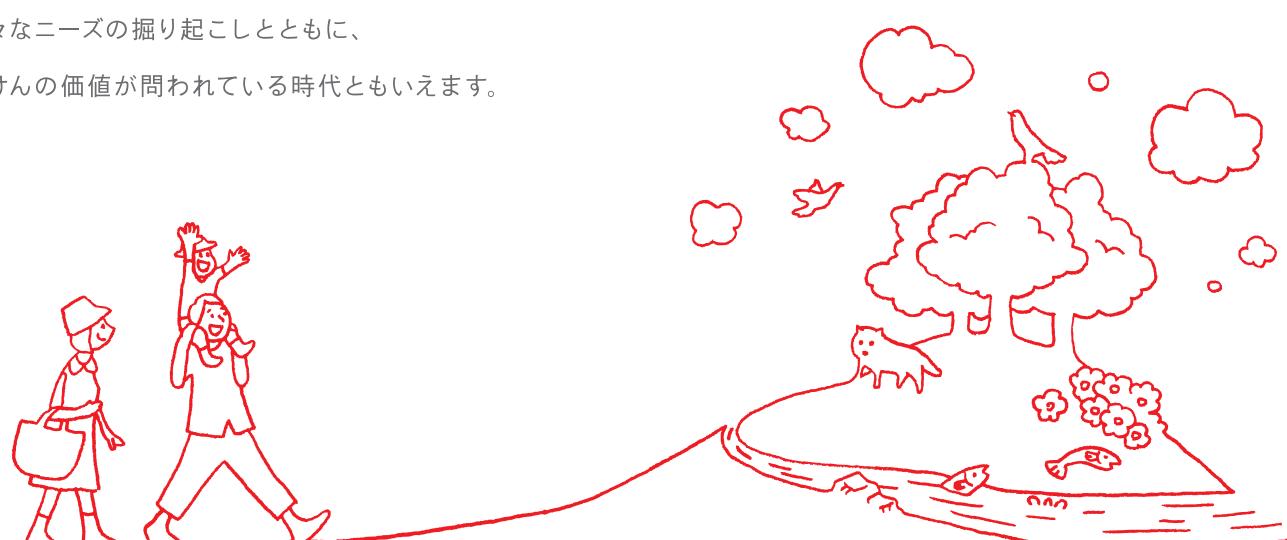
また一方では、若い世代に向けて、

量販店やバラエティストアなどの小売店では、

石けん売り場が広がり、より多くの品揃えが求められてきています。

様々なニーズの掘り起こしとともに、

石けんの価値が問われている時代ともいえます。



### 家族の石けん、そして一人ひとりの石けんへ。

1970年代から80年代にかけて、時代は高度成長から成熟期へとさしかかり、さまざまな市場で「ニーズの多様化・細分化」が起こりはじめます。めまぐるしく変化するお客様ニーズに対応するため商品アイテムが一挙に拡大し、市場にモノがあふれた時代です。そして1990年以降、インターネットの普及を経て、今やソーシャルネットワークの時代。石けんという商品も、一人ひとりの暮らし方に寄りそう、よりパーソナルな存在へと進化していくことでしょう。しかしその原点にあるのは、これまで“家族の暮らし”をささえてきたのと同じ「美・清潔・健康」という搖るがない本質です。日本にお風呂文化がある限り、その基本は変わりません。



### 水に溶け、環境にやさしい、石けんはエコのお手本。

さて、お風呂や洗顔など家庭で使われた石けんは、その後どこへいくのでしょうか。ふつう石けんカスなどを含む生活排水は下水道を通って下水処理場に運ばれ、ろ過などの物理処理と、微生物による生物処理が行われます。石けんは水に溶けやすく、しかも微生物の餌として分解されやすい「生分解性」が高いという性質を持っているため、この生物処理の過程でほとんど自然に還ります。仮に石けんカスを川や海に直接流したとしても、やはり同じように自然界の微生物によって分解され、魚などの栄養源に生まれ変わります。石けんは、自然に還る—知られざるもうひとつの旅です。

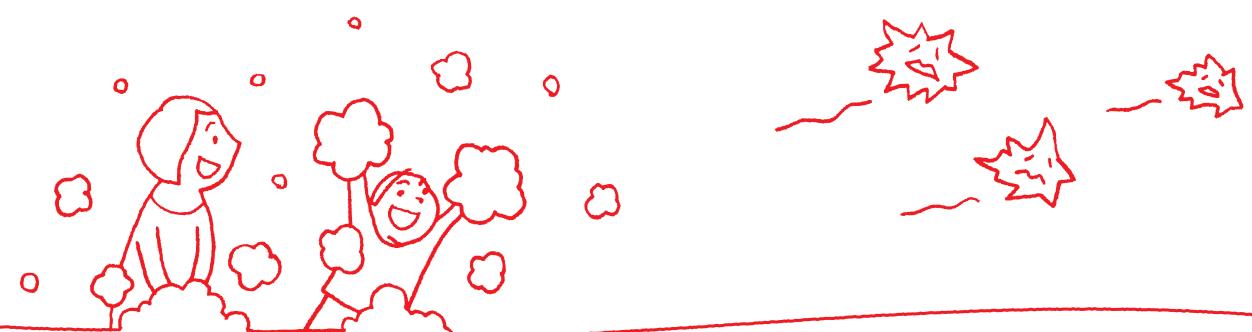


### 石けんのこれからは、明日につながっている。

こうして小さな石けんは何千年もの旅をして、今も私たちの暮らしの中にあります。時代が変わり、人が変わり、少しづつ暮らしも変わっても、「普段」という大切な時間は変わりません。石けんは、その時間を「美しさ・清潔さ・健やかさ」という多くの人たちの願いとともに歩んできたのです。かけがえのない一日一日。普段の時間を、不断の時間にするために—石けんの旅は、また今日から明日へと続いているのです。

そもそもどうして  
汚れが落ちるのか。  
石けんが持つ洗浄力は、  
不思議な力で出来てきました。

石けんは、さっぱりとした洗い上がりを  
とくに好んで使用される人も多いです。  
また、若い世代にとっては、幼いときから  
洗顔料や液体ボディシャンプーに慣れ親しんできたため、  
固形である石けんを新鮮なものとして感じる傾向もあると考えられます。  
そのような空気にいちはやく気づいた小売店では、  
石けんの良さを改めて売り場で発信しています。  
今一度、石けんの実力を魅力に変える理解が、  
これからの石けん売り場には有効ではないでしょうか。



### だからキレイになる、汚れを落とす石けんの仕組み。

なぜ石けんを使うと体の汚れがよく落ちるのか、その理由を分かりやすくお話をします。石けんが落とす体の汚れは、主に皮膚についたホコリや、肌から分泌される皮脂や汗などです。中でも皮脂は油性のため他の汚れと混ざり合って肌に付着します。“水と油”という言葉があるように、体の汚れが水洗いだけで落ちないのは、この皮脂（油）が水をはじいてしまうからです。石けんは油によくなじむ「親油基」と、水によくなじむ「親水基」という二つの部分からできています。その「親油基」が汚れのついた油分をつつみ込み、「親水基」がその汚れを水になじませて浮き上がらせます。後はお湯で流してお肌スッキリ。このように、石けんは水と油の両方になじむ性質を持っているため、体に付いた脂汚れもキレイに洗い落とすことができるのです。石けんのように、水と油の両方の性質をあわせ持ち、汚れを落とす効果のあるものを「界面活性剤」と呼びます。実はこの呼び名、より深く石けんを知るためのキーワードなのです。

石けんの分子の模式図



約50万分の1ミリ以下で、  
肉眼では見えません。



親水基と親油基が、なじみあわない水と油の「仲立ち」として働き、  
油汚れを水に溶かします。

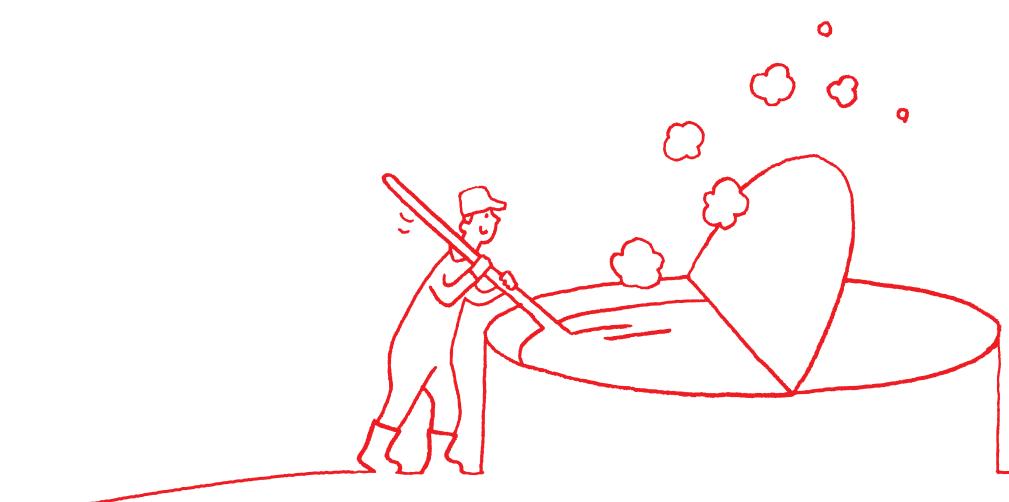
### 水と空気や、水と油の境界面を「界面」と呼ぶ。

それではもう少し踏み込んで、分子レベルで石けんの働きをみていきましょう。まず水と油を同じ容器に入れると、水が下、油が上になった2つの層に分かれます。この2つの層の境界面を「界面」と言い、そこでは界面張力（表面張力）が強く働いて、混ざり合うことを「避けよう」とします。これは、水の分子が油と混ざった不安定な状態よりも、水としての物質的安定を求めるからだと言われています。では次に、先ほどの容器に石けんを入れてかき混ぜてみましょう。油が水に溶けて乳液状の液体になります。これが前項で説明した親水基と親油基の働き。親油基が界面の油にとり付き、親水基が油のまわりをおおうことで「油が水に分散した状態」をつくるのです。界面活性剤には石けんのほかに、お菓子づくりに使う乳化剤や、マヨネーズに含まれるレシチンなどがあります。マヨネーズの場合、卵黄に含まれたレシチンが油と水分（お酢）を混ぜるために一役買っています。



製法がちがえば、  
石けんの持ち味もちがう。  
いい石けんは、  
つくり方の質で決まります。

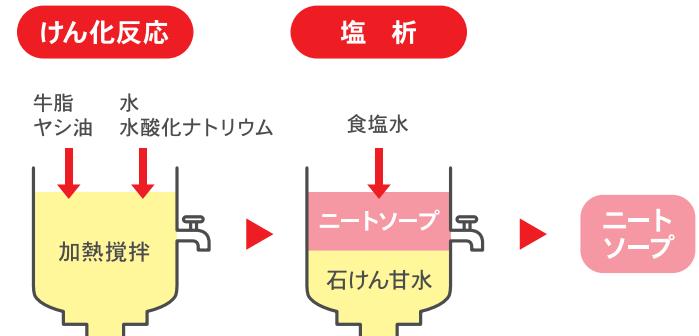
化粧品店、ドラッグストア、スーパー、百貨店、  
バラエティショップ、通信販売など、  
石けんの市場はいたるところに。  
一つひとつを丁寧につくる、  
大量生産でスピーディーにつくるなど製法もさまざま。  
石けんのクオリティや使用感は、  
使用油脂や原材料によっても異なりますが、  
製法によっても差が出ます。



石けんをつくる、代表的な2つの製法。

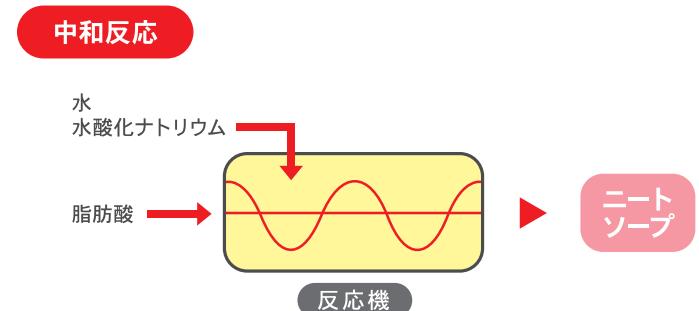
#### 釜だき製法(けん化塩析法)

原料となる牛脂やヤシ油を反応釜で加熱・攪拌しながら水と水酸化ナトリウムを加え、油脂を石けんの状態にする「けん化」と、それに食塩水を加えて不純物を分離する「塩析」の2つの工程を経て、約1週間かけて「石けん素地」の素となるニートソープ（高純度の液状石けん）を熟成します。昔ながらの手法をベースとしているため完全な機械化は難しく、熟練した職人の技を必要とする手間ひまのかかる製法です。こうして丹念につくられたニートソープには、肌あたりのやさしさを生む良質の天然うるおい成分がほどよく含まれます。



#### 中和法

あらかじめ原料油脂を分解して得られた脂肪酸に水酸化ナトリウムを加え、反応機（連続中和装置）で加熱・攪拌して中和させニートソープを取り出します。すでに分離してある脂肪酸だけを使うので、不純物を取り除く「塩析」の必要がなく、短時間でニートソープがつくれます。また脂肪酸のレシピ設定によって容易に品質のコントロールができるため、大量生産に向いた製法だといえます。



石けんをつくる、石けん素地とは。

釜だき製法や中和法によってつくられた液状のニートソープは、乾燥によって水分調整され「石けん素地」と呼ばれる固形の状態になります。これは数千年前から使われていた石けんの“原型”とも言えるもので、この時点ですでに界面活性剤としての基本的な特徴を備えています。こうしてできた石けん素地は、その名のとおり“化粧石けん”的素材として利用されます。香料や保湿成分を配合し、様々な商品に生まれ変わって、暮らしの中へと届けられます。

石けんといえば、  
牛乳石鹼と呼ばれるために。  
手間ひまかかる  
石けんにこだわります。

統計データを考察すると、固形石けんの2011年の

国内流通量（生産量+輸入量-輸出量）は、約55,000トン台にのぼります。

おしゃれな化粧品専門店が増えてきたことで形成される、新しい石けんのイメージ。

また“香りを楽しむ”雑貨としての定番化、

そして若い世代では目新しいものとして関心が高まっています。

そのような市場においても、牛乳石鹼は国内でご愛用数第1位に支持されています。

## 国内最大級の釜だき設備と牛乳石鹼のこだわり。

牛乳石鹼といえば赤箱・青箱。そのロングセラーをささえるのが、やさしさにこだわった独自の「釜だき製法」です。古くからの手づくりの良さを受け継ぎ、機械化できない大切な工程を職人の技と経験にゆだね、石けんと対話しながらゆっくり熟成させていく。この手間ひまかかる作業の過程で、天然油脂由来の良質成分が、肌あたりのやさしい“天然うるおい成分”として石けんに含まれていきます。国内でご愛用者数第1位——その理由は、日本人のお肌がいちばん良く知っているのかもしれません。この赤箱・青箱に代表される牛乳石鹼の製品は、国内最大級の釜だき設備を持つ安田工場で国内生産し、みなさまのもとへお届けしています。その数は年間1億個以上。縦にならべると、ほぼ地球を1/4周する長さになります。私たちは、その数の多さを誇るよりも、その道のりで積み上げてきた「やさしさ」へのこだわりを大切にしてまいりたいと思います。



牛乳石鹼安田工場には「釜だき製法」に使用する  
直径4メートル・容量60トンもの大きな釜が11基あり、  
石けん工場としては日本最大規模を誇ります。

## 洗い上がりや香りで選べる「赤箱」と「青箱」。

肌あたりのやさしさは、どちらも同じ。独自の釜だき製法による“天然うるおい成分”が、ほど良く含まれています。クリーミィな泡でしっとりと洗い上げる、うるおいと香りゆたかな「赤箱」。ソフトな泡立ちでさっぱりとした洗い上がりの「青箱」お好みに合わせてお選びいただけます。



カウブランド 赤箱

- しっとりすべすべなめらか美肌に洗い上げます。洗顔にも使えます。
- ゆたかでクリーミィな泡立ち。
- ミルク成分（乳脂：お肌の保護成分）とスクワラン（うるおい成分）配合。
- やさしいローズ調の花の香り。

カウブランド 青箱

- さっぱりすべすべ素肌に洗い上げます。
- ゆたかでソフトな泡立ち。
- ミルク成分（乳脂：お肌の保護成分）配合。
- さわやかなジャスミン調の花の香り。

